

令和七年度入学試験問題 国語（五十分）

二月二日 実施

〔注意〕

- 一、試験開始の指示があるまで問題を開いてはいけません。
- 二、問題冊子は15ページあります。試験開始後すぐに確かめてください。
- 三、解答はすべて解答主紙に記入してください。
- 四、問題冊子の表紙及び解答主紙に受験番号（算用数字）と氏名をはっきり書いてください。
- 五、字数制限のある場合、句読点・カッコなどはすべて字数に数えます。
- 六、試験終了後、解答主紙のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってください。
- 七、試験中、机の上から物を落としたり、気分が悪くなったり、何か用ができた時は、手をあげて監督の先生に知らせてください。

受験番号

氏 名

東京女学館中学校

一 次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

新学期が始まり、蒸し暑さがだんだんと弱まっていくにしたがって、瀬里奈の背はさらにのび、顎はどんどんとがっていくようになった。他のクラスの女の子から、「モデルさんみたい」などと言われているのをよく耳にした。

瀬里奈は自然と、いろんな女の子から声をかけられるようになっていた。特に、早野さんは、瀬里奈が気に入ったのか、たびたび自分のグループを離れて、瀬里奈に話しかけてくるようになった。

私は、瀬里奈が突然「出世」したことにどきどきしていた。

①「最近、ちよつと調子に乗っているよねえ」

麗ちゃんは急速に目立ってしまった瀬里奈のことが気に食わないみたいだった。麗ちゃんは、自分を仲間に入れて親切にしてくれた女の子として、瀬里奈に感謝されたがってるようだが、その思惑がうまくいかずに苛立っているみたいだった。

「久美ちゃんも、最近あの子にべったりだしさ。だから、私、あんな子嫌だって言ったんだよ。せつかく仲間に入れてあげたのに、やっぱり、あんな子、誘うんじゃないかった」

私は同意も否定もせず、麗ちゃんの愚痴を聞いていた。今も、瀬里奈の机のほうから、早野さんの声が聞こえてきていた。

「うわあ、やっぱり、腕、ほっそい。塚本さんって、ダイエットとか、必要ないでしょ」

「さあ……」

机の上に出ていた算数の教科書をしまい、次の国語の教科書をゆつくりと探しながら、瀬里奈は早野さんの顔も見ずに返事をした。

「本当、背が高いから目立つよね。よく中学生に間違えられるでしょ、私もそう。電車に乗るとき、いつも怒られる」

「電車、あんまり乗らない」

「ね、塚本さん、あたしら、今度の日曜、皆で買い物いくんだけど、一緒に来ない？ スタイルいいから、いろいろ試着させてみたいな。楽しいよ？」

「ううん、人ごみ、嫌い」

そう言うと、早野さんは可笑しそうに、

「塚本さんって、本当、マイペースだよ。いいキャラしてるよ、面白い」
②
と言いながら、子供にするように瀬里奈の頭を撫でた。

「また、今度ね」

早野さんが手を振って、友達のところへ戻って行った。瀬里奈はその拍子に乱れた黒髪を、直すでもなく、悠長に次の授業の支度をしていた。

その日の帰り道、私は瀬里奈に何気なく尋ねた。

「ね、瀬里奈は早野さんが嫌い？」

「別に？」

「じゃあ、何で話しかけられても、いつもむすつとしてるの？」

③
「そんなつもり、ないけど」

「嫌いじゃないんだったら、ちょっと話してみたら？」

「なんで？」

「いろんな子と話してみるのも、いいと思って。私や久美ちゃんばかりと一緒にいるより、世界が広がるかもよ」

そう言うと、瀬里奈はシヨックをうけたようだった。

「律は私のこと嫌いな？」

「えっ、違うよ、そういう意味じゃないよ。ただ、瀬里奈がひよつとしたら、楽しいかも、って思っただけ。早野さん、いい人そうだし」

早野さんはさっぱりとした性格で男子からも女子からも好かれていたので、瀬里奈とも気があうかもしれないと思った。それに、せっかく「出世」できそうなのだから、私たちの狭い世界の中にずっといては勿体ないような気がした。クラスの中でこんな出世劇が起きるなんて、奇跡みたいなことなのだ。私はそれをこの目で見てみたいのかもしれないかった。

④
「思っただけだから、気にしないでいいよ。嫌なら、無理しないで」

「……律がそう言うなら、少し、話してみるけど」

「うん、話す相手が増えるの、多分、瀬里奈にはいいと思う」

私は少し声を低くして、言った。

（中略）

瀬里奈は、早野さんのグループと行動を共にすることが、だんだん増えていった。昼休みも、給食を食べ終えた瀬里奈に早野さんが「こっち、こっち」と手を振り、自分達のほうへ誘い出したし、帰りも、「瀬里奈、一緒に帰るでしょ？　うち寄ってかない？」などと背中を叩き、自然と二人は一緒に帰っていった。

背の高い二人が一緒にいると、とても目を引いた。早野さんはきりつとしたいわゆる美人で、耳の見えるショートカットをいつもワックスで綺麗にまとめていた。ティーン向けの雑誌の街頭スナップに載ったことも何度かあった。その早野さんが、「うらやましいなあ、瀬里奈、顔ほんと小さいし、腰の位置があたしと全然違うじゃん。ちよつと、何頭身あるかはからせて。どうすればそうになれるの？」

などと言うので、ぎすぎすに骨ばって不気味だと言われていた長い手足が、まるで皆の目指すところであるかのように思えてくるのは不思議だった。学校の中の A は、 B のある子によって支配されてるんだなあ、などと、私は感心してその様子を眺めていた。あの、桜の降っていた四月のころとは、瀬里奈の C は面白いように正反対になっていた。

「瀬里奈ちゃん、やつぱりあっちのグループが良かったんだね」

久美ちゃんが残念そうに言った。

運動会が終わり、冬の匂いが増える日が増えて、押入れの中からセーターを出したところには、私と瀬里奈はほとんど喋らなくなっていた。瀬里奈のいなくなった、私、麗ちゃん、久美ちゃんの三人組は、また元通り、大人しい女の子のグループになって、クラスのすみっこに溶け込んでいった。

高い値段のついた女の子がこれからどうなっていくのか、私には見当も付かなかった。麗ちゃんは、久美ちゃんがやたらに瀬里奈になついた一件を根に持っていて、今度は私に、久美ちゃんには教えない内緒の話を耳打ちしたり、何かといえれば手をつないでトイレに連れて行ったりするようになっていた。

トイレで髪のをを整えながら、麗ちゃんは私に耳打ちした。

「久美ちゃんって、悪い子じゃないんだけど、ちょっと八方美人だよねえ。ね、バレンタインの計画のこと、久美ちゃんにはまだ内緒ね。だって、口が軽そうなんかもん」

麗ちゃんは、今からバレンタイン目指して、ダイエツトしながら、手作りチョコレートの練習をするんだと張り切っていた。

私は麗ちゃんの好きな男の子のクラスにわざわざ偵察ていさつに行つて、席替えで今度はどこの席になったとか、同じ男の子が好きらしい女の子がクリスマスに何かしかけるつもりではないかさりげなく調べたりだとか、麗ちゃんの指示に従っているいろいろと行動しなくてはならなかった。

「ねえ、どのチョコがいいかな、アーモンド、好きかなあ。トリユフかなあ」

「別に、気持ちがいればいいんじゃない」

「えー、律ちゃん、真面目に考えてよね。もういいよ、協力してくれないなら、一人でやるから」

麗ちゃんはずっかりするとすぐにそうして機嫌きげんを損ねてしまうので、私はなるべく麗ちゃんを刺激しないような言葉を選ばなくてはならなかった。

⑤ 人との会話はワークブックに似ている、と私は思った。相手の性格や状況などを考えてできるだけ素早くどんな返事が求められているか把握はあくし、的確な返答を考え出すのだ。そう思うと、前ほど難しいことではないような気がした。私はⅡと、答えを埋めていった。

冬休みが終わり、五年生もだんだん終わりにさしかかるころには、私はその単調な作業に随分ずいぶん慣れていた。

バレンタインデーの日、私は麗ちゃんに連れられて彼女の好きな男の子のマンションの下で、彼が来るのをずっと待っていた。麗ちゃんは、いざとなると、

「やっぱり、無理！」

と言つて、私の手をつかんで逃げ出した。結局、私達は麗ちゃんの手作りのトリユフをいっしょに食べながら帰った。麗ちゃんが言った。

「律ちゃんって、ほんとにいい子だよ。私、律ちゃんと友達でよかった」

「え、私が？」

麗ちゃんにそう言われることが意外で聞き返すと、麗ちゃんは私の手を握りながら、

「うん。私、お友達の中で律ちゃんが一番好き。優しいし、嫌なこと絶対に言わないし、口も堅いし。これからも仲良くしてね」と言った。私は麗ちゃんの作った甘ったるいチョコレートを口の中で溶かしながら頷いた。

家に帰ると、母が玄関に出てきて言った。

「律、この前の塾のテスト、すごくよかったじゃない」

「そうかなあ」

「とくに社会は、苦手だったのに本当に偉かったわね。今日は、律の好きなもの、何でもつくってあげるわよ」

「いいよ、お母さんも疲れてるんだから、たまには休みなよ。私、今日は宿題ないんだ。晩御飯、つくってあげるね」

そう言って部屋に鞆を置き、台所に立ってお米をとき始めた私に、母がしんみりとした様子で言った。

「律は、本当にしっかりした、いい子に育ったわね」

「別に、そんなことないと思うけど。いいから、テレビでも見てれば」

「ありがとうね、律」

冷蔵庫から野菜を出しながら、ふと母の方を見ると、目頭を押さえているようだった。

私は、自分がいつのまにか、ワークブックでとてもいい点数をとっていたことを知った。それで、私はワークブックの最後のまとめテストで満点をとったような、おかしな爽快感を得た。⑥ごほうびに、何かしたいことをしてもいいんじゃないか、と私は思った。⑦私は、窓の外の灰色の光景を眺めながら、遠くへ行きたいと思った。見覚えのない景色の中を、少しだけでいいから歩きたい。

※出題の都合上、一部表記のしかたを変えたり、省略したりしたところがあります。

(村田沙耶香『マウス』より)

問一 文中の I・II にあてはまる語句を次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|----|---|------------------------|---|------------------------|---|----|---|----|
| I | ア | 二つ | イ | 重ね | ウ | 口 | エ | 生 |
| II | ア | 悠々 <small>ゆうゆう</small> | イ | 淡々 <small>たんたん</small> | ウ | 堂々 | エ | 脈々 |

問二 ―線部①「最近、ちょっと調子に乗っているよねえ」とありますが、このときの「麗ちゃん」の「瀬里奈」に対する心情を説明したものとしてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア ただ見た目が大人びただけなのに、友達が増えたことを自慢じまんしているのが許せない。
- イ 目立つ前から仲間にしてあげたのに、今ではそのことが忘れられているようで納得できない。
- ウ 最初から皆に注目される存在になると思っていたが、実際にそうになってしまうのは気に入らない。
- エ クラスのリーダー格の早野さんに気に入られてから、見せつけてくる態度が気に入らない。

問三 ―線部②「子供にするように瀬里奈の頭を撫なでた」とありますが、このときの「早野さん」の「瀬里奈」に対する心情を説明したものとしてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 瀬里奈の素っ気なく否定ばかりしてくる態度に、かえって愛らしさを感じている。
- イ 瀬里奈に外見的魅力を感じる一方で、頑固がんこで子どもっぽい内面をなじりたいと思っている。
- ウ 誰だれとも群れようとしない瀬里奈の、実は誰かに守られたいという本心を見抜ぬいている。
- エ いろいろな点をほめたのに素直に喜ぼうとはしない瀬里奈に困惑こんわくし、子ども扱いあつかしている。

問四 — 線部③「嫌いじゃないんだったら、ちょっと話してみたら？」とありますが、「律」がこのように提案したのはなぜですか。その説明としてふさわしくないものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- ア 男女問わず交友関係の広い早野さんを通して、瀬里奈には友人を増やし明るくなってもらいたいから。
- イ 身近な友人である瀬里奈が、階層上位のグループで過ごすことで変化していく姿を見たかったから。
- ウ 瀬里奈は消極的な性格なので、早野さんとうまく関わっていきそうにないと心配になったから。
- エ 大切な友人である瀬里奈の交友関係が広がり、学校生活を楽しいと思えるようになってほしいから。

問五 — 線部④「出世劇」とありますが、これは「瀬里奈」がどう変化していくことを表していますか。四十字以内で説明しなさい。

問六 文中の A C に入る語の組み合わせとして、もつとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア	A 雰囲気	B 発言権	C 性格	イ	A 雰囲気	B 存在感	C 容姿
ウ	A 多様性	B 正義感	C 立場	エ	A 価値観	B 存在感	C 容姿
オ	A 価値観	B 発言権	C 立場				

問七 — 線部⑤「人との会話はワークブックに似ている」とありますが、「律」は、「人との会話」のどのような点が「ワークブック」と似ていると考えていますか。「〜」という点。」につづくように二十五字以内で答えなさい。

問八 ――線部⑥「おかしな爽快感^{そうかい}」とありますが、なぜ「おかしな爽快感」だと「律」は感じたのですか。それを説明したものとしてみっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 本心ではない言葉でも真心をこめて話せば、たとえ自分の親であっても感動させられることに気づいたから。

イ 友人や親の気持ちを動かすような会話は本来すがすがしいはずなのに、実際は苦しく後悔^{こうかい}の残るものだったから。

ウ 人との会話はそんなに簡単ではないはずなのに、相手の求める反応を示せたことが意外だったから。

エ 友達が少なく人との会話が苦手だった自分が、最近身近な人から好かれるようになったことを皮肉に感じているから。

問九 ――線部⑦「私は、窓の外の灰色の光景をく少しだけでいいから歩きたい」とありますが、人との会話をワークブックのように感じている「律」にとって「見覚えのない景色の中を歩く」ということはどのような意味をもっていますか。二十五字以内で説明しなさい。

二次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

いま若い層に人気のある、そう、えーと「ともゆき」さんだっけ、あの人が言ってる「論破力」というのが何なのかを考えてみようと思う。

この言葉については、いろいろな話の流れで、売り言葉に買い言葉というやりとりになって出てきたり、まさに若い人たちが、面白がってあまりいろいろな気をつかわずに「はい論破！」なんて使ったりするから、もともとどういうつもりで「論破！」なんて言ってきたのかもだんだんわからなくなっている。

でも、いろいろなやりとりを見直すと、そこで言われている論破というものが、説得するための話の内容やその揺るがない組み立てではなくて、人に説得をするさいの話し方、空気や状況のつくり方の話だということは、もうわかってきている。^①議論している人たちの勝ち負けを決めるのは、議論している人たちを観ているテレビやYouTubeの司会者や観客のフィーリングや受け止め方だということ。

だからここで言う「論」を「破る」とは、「言い負かしたという印象を観ている人たちに与える」こと、つまりこれは言論の力じゃなくて、空気づくりの演出力の話だということだ。理屈の組み立てや、そのスキのなさじゃなくて、「そういう感じと流れをつくり上げる」あの手この手ということになる。

人に「なるほど」と思わせるために、いろいろな工夫をすること自体は別にそんなに悪いことじゃない。わかってほしいという気持ちを表現するためには、大事なところがきたらアイコンタクト（相手の目をしっかりと見る）をとる必要もあるし、大きな声を出さないで、淡々と、そして重要なポイントのところを「わざと声をひそめてゆっくり話す」というのも重要なテクニクだ（これは大学の講義でも僕がよく使う技法だ）。

A、これは自分の言いたいことの理屈をきちんと組み立てて、その上でハートを伝えようとする中で生まれてくるものだから、話の内容がウソだったり、事実の裏付けのない決めつけだったり、自分の思い込みを気ままに「みんなも言ってますけど」とすりかえたりすることで、聞いている人に「その気にさせる」ということなら、それはもう議論でも話し合いでもない。

②ここには、議論をするために絶対に必要なものがないからだ。

それは、「この言葉のやりとりをすることで、自分のこれまでの思い込みや考えの組み立て方が変わる可能性があるのだ」、「優れた言葉のおかげで自分が成長しうるのだ」という、自分と相手と言葉に対する信頼だ。

僕が少し前に、知的成長とはメマイを起こすことだと言った意味は、まさにここにつながっている。誰でも自分が強く思い込んでいることに揺さぶりをかけられていることを認めたがらない。なぜならば、その前提が崩れると、自分の主張そのものが動揺してしまうだろうことをどこかでわかっているからだ。正しいと思っていたことが「そうでもなかったのだ」ということに直面するのは、しんどいし辛いことかもしれない。

しかし、それを避けて、あまりに恐れて目をつぶれば、そこで言葉のやりとりをする者としては成長と発展は止まる。恐怖に直面しなくて楽ちんだが、本当はその後にもっと怖い事態、つまり「大雑把で荒っぽくて不正確で思い込みばかりが強いわりに、人の納得を得られない物言いばかりになること」が待っている。

B 知的に豊かに大きくなるためには「自分は間違っているのかもしれない」という慎ましい姿勢と、自分の考えを変える可能性のある他者と言葉への敬意がなければならない。

自分を揺さぶる言葉に会った時には「え？」と思う。それがメマイだ。でも「その後」が決定的なのだ。理屈の組み立てを丁寧にとどめていって、「そういうふうの説明されれば、なるほど自分の考え方も違って見えますね」ときちんとお腹に落として確かめる **X** が必要だ。

だから、議論をする時に一番成長を手放す、議論することの意味を台無しにしてしまうのが次のような言葉だ。痛いところを突かれる、動揺させられる、どこかで自分の言っていることのいい加減さに気づいた時に、勇気がなくて言ってしまうアレだ。

⑤ それって、あなたの感想ですよ。

これを別の言葉に言いかえると、「僕は僕の言うことの根拠を再確認なんてする気はないですよ。だって僕がそう思うんだからそうなのであって、あなたはあなたで違うんだから、それはあなたのフィーリングでしょ？　つまり感想なんだから、あなたの負けてことで、ほとんどの人がそう思ってるはずですよ」になる。

何を恐れているのか？ 何がそんなに怖いのか？

そして、やっぱり聞いてみたくなるのだ。

あなたは、人と議論をして、そのことで自分が変わりうるのだという前提がありますか？

あるならば、「それは感想でしょ」ではなくて、あくまでも「その主張の根拠」を問うように尋ね返せばいいのであって、相手が言葉を返せないような舞台風景をつくり変えるようなことをして、あなた自身の言葉が研ぎ澄まされたものになる可能性を自分で捨ててしまいませんか？

もし変わりうる自分という前提がないなら、何のためにあなたは人と議論をするのですか？
そして、一番聞きたいのは次のことだ。

あなたは、他者との議論において本当は何を一番失いたくないのですか？

相手を言い負かしたり、誰かが誰かを論破しているシーンを観ることは気持ちがいいのかもしれない。C、人は自分の心の中にどんなイライラやフラストレーションを溜め込んでいるかを、自分でもあまり正確にわからないから、そのイライラを解消してくれるような場面や人の行動を観ることでスッキリすることがあるからだ。自分の代わりにやってくれて、あたかも自分が「はい論破！」って言い負かしているような気にもなってくるだろう。勝った！

そういうことはあると思う。

僕だって、そういうやりとりを目にした時には（とくにやり合っている片方の人をあまり好きでなかったりした時）、ちよつとスッキリすることもある。でも、それは思い返せば、わずか一〇秒くらいの間だ。スッキリした一秒後には、なにやら虚しい、切ない、明日につながるいやりに加担してしまったという気持ちが訪れる。

それは、基本的には議論というものとあまり関係がない出来事だ。

(中 略)

勝つ？ 何に勝つのか？ 勝つと何が得られるのか？

負ける？ 負けると何を失うのか？ 負けると終わりなのか？ 何が？

そろそろわかってくれたと思う。

論破力とは、言い方や雰囲気を通じて相手を嫌な気持ちにさせて、Yを、格好よく言い換えたものにすぎない。でも僕は、この言葉を不適切に使う人たちを決して責めたくはない。

論破力という言葉は、心が苦しいと感じている、自分と同じ、勇気が少し足りない人間が頼りにする（だからこそ）^⑦「強い言葉」だからだ。

でも、本当に強い者には、強い言葉は必要ない。「はい、論破！」と言って、苦しい気持ちの誰かが、何かを守っている。責めてはいけない。彼・彼女らを守ってやらねばならない。

(岡田憲治『教室を生きるのびる政治学』より)
※出題の都合上、一部、文章を変えたり、省略したりしたところがあります。

問一 文中の A C にあてはまることを次の中からそれぞれ選び、記号で答えなさい。

ア しかし イ なぜならば ウ また エ だから オ それならば

問二 — 線部①「議論している人たちの勝ち負けを決めるのは受け止め方だということ」とは、どういうことですか。説明としてもっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 議論において大切なことは、司会者や観客自身が話の内容やその揺るがない組み立てを考えることであるということ。
イ 議論の勝ち負けはその議論をしている人たちではなく、司会者や観客の意志や考えが左右しているということ。

ウ 議論はその内容や理屈の組み立てではなく、言い負かしたという印象によって勝ち負けを判断されているということ。

エ 議論において「論破」という言葉がどういう意味を持つのかを決めるのは、司会者や観客の役割であるということ。

問三 — 線部② 「議論をするために絶対に必要なもの」を十五字以内で探し、初めの五字をそのまま抜き出して答えなさい。

問四 — 線部③ 「それ」はどのようなことを指していますか。四十字以内で答えなさい。

問五 文中の X にあてはまる語句として、もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 理屈 イ 根拠 ウ 勇気 エ 他者

問六 — 線部④ 「議論することの意味」とありますが、筆者が考える「議論する意味」とはどのようなものですか。十字以内で答えなさい。

問七 — 線部⑤ 「それって、あなたの感想ですよ」という表現について、筆者の主張によると、この言葉の代わりにどのように返答をするべきですか。具体的な返答を二十字以内で答えなさい。

問八 — 線部⑥ 「他者との議論において本当は何を一番失いたくないのですか？」とありますが、議論の勝敗にこだわっている人たちが「失いたくない」と考えているものは何だと考えられますか。一語で答えなさい。

問九 文中の Y にあてはまる表現として、もっとも適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分が変わろうとする勇気を封じ込めてしまうとても臆病なやりとり
イ 論理的に正しいかどうかだけを優先して他に何も考えない視野の狭さ
ウ 人を信じようとする勇気が出ない自分の気持ちを隠そうとする行為
エ 自分自身を感じていることや考えていることに正直に従う勇気

問十 — 線部⑦「『強い言葉』」とありますが、なぜ筆者はこの言葉にカギカッコをつけたのですか。その理由としてもつとも

適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア この部分だけ筆者が本当に発言しているから。

イ 今までに出てきた言葉を引用しているから。

ウ 一般的な意味とは異なる意味で用いているから。

エ 文の最後であるため、結論として強調したいから。

三次の短文中的——線部のカタカナを漢字に直しなさい。

- | | | | |
|---|---------------------------|----|---------------------------------|
| 1 | 余計なものをジヨキヨする。 | 2 | 安全ホシヨウ上の問題が発生した。 |
| 3 | 髪 ^{かみ} の毛を黒くソめる。 | 4 | あの人は人氣のゼツチヨウにいる。 |
| 5 | 私の親友はジュンシンな人だ。 | 6 | シュシヤ ^{せんたく} 選択して合理化する。 |
| 7 | このあたりはコクソウ地帯と呼ばれる。 | 8 | 家族をやシナうためにはたらく。 |
| 9 | ユウバえのきれいな景色である。 | 10 | サクシ家を目指す。 |

